聖霊降臨後第８主日（特定１１）　　2010/7/18

聖ルカによる福音書第１０章３８節ー４２節
　於：聖パウロ教会
　司祭　山口千寿

　先週の福音書では、「良いサマリア人の譬え」を読みました。今日は、その続きの「マルタとマリア」の物語を読んでいます。この２つの物語は、いずれもルカ福音書独自の有名な物語ですが、両方とも大変分かりやすくて、読んだ人の心の中に印象深く残る物語です。同時に、この２つの物語を巡っては、どのように解釈したらよいか、常に議論が巻起こる物語でもあります。
　先週の復習になりますが、「良いサマリア人の譬え」で、イエスさまが最後に律法学者に向かって、「行って、あなたも同じようにしなさい」と仰った言葉は、このサマリア人のように、困っている人を見つけたら助けてあげなさいと、善い行いをすることを命じている言葉でしょうか。むしろ、「神さまに愛されていることを知って、その愛をもらう人になりなさい」と勧める言葉です。
　律法学者は、掟を守るために自分が愛の業を行う主体として、自らが愛を行うものとして、その相手である隣人とは誰かと尋ねたのです。しかし、イエスさまは良いサマリア人のたとえで、このサマリア人こそがイエスさまご自身であって、そのイエスさまが隣人となってあなたに愛を運んできてくださっているのだから、そのイエスさまの愛、イエスさまを通して与えられる神さまの慈しみにあずかる者となるようにと、律法学者に勧めたのです。
　丁度、それと同じように、今日のマルタとマリアの物語でも、イエスさまはマルタに向かって、「イエスさまからのおもてなしを受けなさい」と勧めているのです。イエスさまを接待することで、心を取り乱すのではなくて、イエスさまが与えて下さるご馳走をいただくことが、なくてはならない一つのことだ、と仰っているのです。
　ヨハネ福音書では、マルタとマリアという姉妹にはラザロという兄弟がおり、イエスさまはこの３人を愛しておられたと記されています。ラザロが病気のため死んだときには、イエスさまは涙を流され、ラザロを生き返らせておられます。そのみ業から、イエスさまの３人の兄弟への愛の深さがいかばかりであったか、伺い知ることができると思います（11：5,35）。ですからマルタとマリアの姉妹とイエスさまの関係は、大変親しい交わりの中にありました。
　イエスさまとその一行が旅を続けてこの姉妹の住んでいる村、ヨハネ福音書ではベタニアの村ですが、そこに到着します。マルタは早速イエスさまを自分の家に喜んで迎え入れて、おもてなしの準備を始めるわけです。
　旅人をもてなすことは、イスラエルの人々にとっては大切な思いやりに満ちた行いの一つでした。今日の旧約聖書日課では（創世記 18：1ー10）、アブラハムが３人の旅人を呼び止めて、足を洗い、休む場所を提供し、そしてご

馳走を振る舞っています。アブラハムのこのような行いは、後の人々の模範として称賛されていますが、教会においても福音の宣教に携わって旅をする弟子たちを懇ろにもてなすことが、信徒たちに求められました。パウロも、しばしば「旅人をもてなしなさい」と勧めています。（ロマ 12：13、Ｉテモテ 3：2、5：10）。

このような麗しい伝統的な慣習に従って、マルタが旅のお客様を迎えて、旅の疲れを癒し、空腹を満たして貰おうと、心を込めて接待の用意に取りかかったことは、当然のことでした。しかも、相手は大切なイエスさまです。イエスさまのために甲斐甲斐しく働くことは、マルタにとっても喜びであったと思います。マルタ一人がイエスさまをお迎えしていたならば、何の問題も起こらなかったでしょう。でも、そこには姉妹のマリアがいました。

マリアはどうしていたかといえば、忙しく働くマルタを気にかけることなく、イエスさまの足下に座って話しに聞き入っています。初めの内は、マルタのことが少しは気になったかも知れません。しかし、イエスさまの話を聞いているうちに、その話しに引き込まれて、我を忘れて一心に耳を傾けていたのです。「聞き入っていた」のです。

「足下に座る」と言うことは、弟子入りするということです。ラビ（律法の教師）の弟子となって教えを聞くことを、その姿勢を「足下に座る」と言いました。パウロもガマリエルという著名な律法学者の「膝下で律法についての厳格な教育を受け」ました（使徒言行録 22：3、岩波訳）。

当時の習慣として、女性がラビの弟子になるなどいうことは、決してありませんでした。会堂で教えを聞くことはあったとしても、直接、弟子となって学ぶことは考えられないことでした。女性は、弟子になるよりは、弟子になった人たちに奉仕することが、その役割でした。ルカ福音書にも、イエスさまの一行に奉仕する女性たちが登場しますが、女性たちは、弟子たちと共に神の国を宣べ伝えるよりは、自分たちの財産を提供し一行を支えています（8：1ー3）。ですから、マリアが弟子として振る舞うことは、当時としては常識を外れた革命的なことだったでしょう。

マルタは忙しさが増すにつれてイライラしてきます。マリアに少しは手伝ってくれてもいいじゃないか、という気持ちが募ってきます。このマルタの気持ちは、わたしたちにもよく分かります。

教会の奉仕の働きでも、大変な思いをしながら一生懸命頑張っているときに、側でそれを見て見ぬ振りをしているのか、少しも手を貸そうとしない人たちがいると、つい気持ちが押さえられなくなって、何もしようとしない人たちを裁きたくなってしまいます。そのような言葉が口を突いて出てきます。イエスさまの教えを折角聞いたのだから、それが行動に移されなければ何の意味もないじゃないか、そう言って非難の眼差しを向けるのです。

マルタはその気持ちをイエスさまに訴えました。リビングバイブルという聖書は次のように訳しています。「先生。私が、目が回るほど忙しい思いをしているのに、まあ、どうでしょう。妹ったら、何もしないで座っているだけなんですから。不公平じゃございません？　少しは手伝いをするように、お

っしゃってくださいな。」マルタは感情がむき出しになっていたかもしれません。
　マルタは接待のために、「せわしく立ち働いていた」のですが、ここで「せわしく立ち働いていた」と訳されている言葉の意味は、「あるべき中心から引き離され、周囲の雑事に心が散り散りになった」状態を表しているということです（『主日の福音Ｃ年』）。
　「あるべき中心」、それはイエスさまのことです。マルタにとって、そしてマリアにとってもそうですが、イエスさまは大切なお方でした。その大切な方をおもてなしするのに、美味しいものを差し上げることは素晴らしいことです。しかし、マルタはどのように歓待するか、思い悩んだのです。思い煩ったのです。イエスさまに暖かいお料理を差し上げるのだから、お皿も暖めよう、次は冷たいお料理だから器を冷やそう、例えば、そういうことで思い煩ったのです。そのように思って一人でてんてこ舞いをしたのです。そうしている内に、イエスさまのことよりも、自分のお料理の準備のことばかりにしか、気が回らなくなっていったのです。
　イエスさまはマルタに、あるべき中心へと目を向けるようにと求められました。マルタの訴えに、お料理の数々のことで心が占領されてしまうのではなくて、イエスさまに集中し、イエスさまがマルタの心の中心を占めるようにとお答えになったのです。それが、「必要なことはただ一つだけである」というイエスさまのお言葉です。いつの間にか心を乱して、イエスさまから離れてしまうのではなくて、イエスさまがいつもマルタの心の真ん中にいてくださるように、そのためにイエスさまに近寄って、その足下に座るように招かれたのです。
　イエスさまは、決してマルタを非難しているのではありません。「マルタよ、マルタよ」と優しく呼んで、感謝をもってマルタを受け止めておられるのです。
　イエスさまの足下に座ってイエスさまからいただくものは何でしょうか。一つはマリアのようにイエスさまのみ言葉をいただくことです。イエスさまは、「人の子は仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人の身代金として自分の命を献げるために来た」（マルコ 10：45）と言っておられるますが、み言葉を語ることによってわたしたちに仕えてくださるのです。そのイエスさまから、神さまの御心を教えていただくために、イエスさまの足下に座るのです。
　もう一つは、イエスさまが「わたしの体、わたしの血」と言って弟子たちにお与えになったパンとぶどう酒をいただいて、わたしたちもイエスさまの贖いのみ業にあずかることです。わたしたちがイエスさまをおもてなしするのではなくて、イエスさまがわたしたちを主の食卓に招いてくださっているのです。
　前の古今聖歌集の聖餐式の聖歌の中に、「かしこみて仰げ　イエスきみ立ちて」という聖歌がありました（215 番）。残念ながら新しい聖歌集には採用されなかったものです。その 4 節に「祭の司も贄もイエスきみ」と歌いました。

聖餐式を司式し献げてくださる方もイエスさまであり、そこで献げられる犠牲の献げ物もイエスさまご自身であるという信仰の言葉を歌ったのです。そのイエスさまのお招きにあずかることを、イエスさまはマルタにも、そしてわたしたちにも呼びかけておられるのです。

神さまのわたしたちに対する心配り、わたしたちに対する配慮と顧みという素晴らしいおもてなしに与ることができるように、わたしたちの姿勢がいつも「あるべき中心」に方向を定めることができるように、今日は祈り求めたいと思います。